

# 令和3年度 学校自己評価書

## 《学校経営計画》

名張市立錦生赤目小学校

学校長 谷口 雅彦

赤目中学校区教育目標  
めざす児童像・生徒像

一人ひとりが生き生きと輝く児童・生徒の育成

なかまと繋がりあって、学ぶ楽しさや自己有用感を育むことができる児童・生徒

### 1 学校教育目標

お互いの人権を認め合い、主体的に考え行動する 心豊かな子の育成

### 2 めざす学校像、幼児・児童・生徒像、教職員像、保護者・地域像

○学校像	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆ 子どもたちが学校に行くことを楽しみにする学校</li> <li>◆ 教職員が働く喜びを実感できる学校</li> <li>◆ 保護者・地域と共にある学校</li> </ul>
○児童像	<ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 意欲をもって自ら学び、確かな学力を身に付ける子</li> <li>(2) 差別を見抜き、差別をなくしていくために、自他ともに尊重できる子</li> <li>(3) 命を大切にし、健康で生き生きと活動する子</li> </ol>
○教職員像	<ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 子どもに対する愛情や責任感をもつ教職員</li> <li>(2) 常に学び続ける向上心と、改善に努める教職員</li> <li>(3) 教育の専門家としての確かな力量と、豊かな人間性をもつ教職員</li> <li>(4) 互いに支えあい、認め合い、組織的に取り組む教職員</li> <li>(5) 保護者や地域住民の期待に応え、信頼される教職員</li> </ol>
○保護者・地域像	<ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 学校と連携して子どもを育てる保護者(共育)</li> <li>(2) 子どもたちを温かく見守り、学校と連携することで、教育効果を高める地域(郷育)</li> </ol>

### 3 学校の現状

### 本年度の改善方策

	児童	教職員	保護者・地域	
強み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・明るく素直で、友だちと協力して活動することができる。</li> <li>・学年の枠を超えて、誰とでも仲良く接することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・すべての教職員で、子どもたちの豊かな学びと育ちに向けて取り組もうとする。</li> <li>・安心して学習に取り組める環境づくりに向けて、改善を図ろうとする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校の教育活動を支援してくれる保護者・地域、ボランティアの活躍がある。</li> <li>・地域で子どもたちを育てる意識の共有が広がっている。</li> </ul>	<p>○ 子どもたちに基本的な生活習慣や学習規律を身に付けさせ、確かな学びを実現するとともに、自他のよさを認め合い、豊かな心を育む教育を推進する。</p> <p>○ 学校教育目標の具現化にむけ、すべての教職員が一致協力して、組織的・計画的な学校経営、学年・学級経営を進める。</p>
弱み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・時間やルールを守ることなど、基本的な生活習慣や学習規律が十分に身につけていない。</li> <li>・自尊感情が低かったり、様々な不安を抱えたりしている子どもたちが少なくない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「生きる力」の育成を見据えた授業力の向上を目指す必要がある。</li> <li>・ライフワークバランスを意識した働き方を実践する必要がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者同士のつながりのさらなる拡大や深まりをすすめる必要がある。</li> <li>・地域における子ども支援の取組の充実を図る必要がある。</li> </ul>	<p>○ 子どもたちにとって魅力ある地域づくりにむけて、保護者・地域との連携を深め、信頼される学校づくりを推進する。</p>

### 4 重点的な取組事項

番号	内容	実施期間				
		元	2	3	4	5
1	子どもたちに基本的な生活習慣や学習規律を身に付けさせるとともに、自他のよさを認め合い、「学ぶ喜び・わかる楽しさ」を体感させる授業、魅力ある教育活動を展開する。	○	○	○		
2	すべての教職員がやりがいをもって子どもたちに接し、さらに組織としての力を向上させる取組を充実させる。	○	○	○		
3	子どもたちが「地域を愛し、今後も住み続けたい」と思えるように、学校・保護者・地域間の相互理解や信頼関係を深める学校づくりを進める。	○	○	○		

## 5 令和3年度の重点目標

<b>重点的な取組事項－1</b>	子どもたちに基本的な生活習慣や学習規律を身に付けさせるとともに、自他のよさを認め合い、「学ぶ喜び・わかる楽しさ」を体感させる授業、魅力ある教育活動を展開する。
-------------------	---

### A 今年度の成果目標

- ① 学校生活が楽しいと感じている児童の割合…87%(児童アンケートによる)
- ② 授業がわかりやすいと感じている児童の割合…90%(児童アンケートによる)
- ③ 自分によいところがあると感じている児童の割合…82%(児童アンケートによる)

### B 目標実現に向けた取組

#### 具体的な方策

- ① 「学びと生活の10か条」を推進するなど、基本的な生活習慣や学習規律を身に付けさせる取組を進めるとともに、子どもたちどうしのつながりが深まる取組を充実させる。
- ② 学力調査等を活用し、本校の強み弱みを分析し、強みの更なる向上を図るとともに、弱みの克服に向けた具体的な授業改善等を、すべての教職員で取り組む。
- ③ 自分の良さを知り、友だちの良さを感ぜられる取組を進めるとともに、子どもたちの人権意識を向上させ、一人ひとりが安心して学べる環境づくりを進める。

<b>重点的な取組事項－2</b>	すべての教職員がやりがいをもって子どもたちに接し、さらに組織としての力を向上させる取組を充実させる。
-------------------	--

### A 今年度の成果目標

- ① 目標達成に向けて、組織的かつ具体的な取組ができたと感じている教職員の割合…85%(教職員アンケートによる)
- ② 日ごろの指導や取組に「やりがい」をもっていると感じている教職員の割合…80%(教職員アンケートによる)
- ③ 一人あたりの時間外勤務時間を昨年度比20%の削減

### B 目標実現に向けた取組

#### 具体的な方策

- ① 日頃の取組の情報交換を積極的に進め、特に課題を抱える子どもや特別な支援が必要な子どもについて、「ONEチーム」としてすべての教職員で共通した指導・支援を行う。
- ② 子どもたちの「わかった・できた」などの言葉や、笑顔で元気いっぱい活動する姿を、教職員の働く喜びとして、子ども目線にした教育活動を展開する。
- ③ 日頃から職員との積極的な話し合いを心がけ、一人あたりの時間外勤務時間を昨年度比20%の削減ができるよう、効果的・効率的な業務推進に心がけ、自身の健康管理と勤労意欲を高める。

<b>重点的な取組事項－3</b>	子どもたちが「地域を愛し、今後も住みつづけたい」と思えるように、学校・保護者・地域間の相互理解や信頼関係を深める学校づくりを進める。
-------------------	--

### A 今年度の成果目標

- ① 地域の行事に参加していると感じている児童の割合…80%(児童アンケートによる)
- ② ゲストティーチャーやボランティアなどを生かした教育活動を積極的に進めていると感じている保護者の割合…90%(保護者アンケートによる)
- ③ 通信や授業参観などを通じて、教育活動や子どもの様子をよく伝えて感じている保護者の割合…90%(保護者アンケートによる)

### B 目標実現に向けた取組

#### 具体的な方策

- ① 日頃から地域との連携を密にして、地域の「もの・ひと・こと」に親しみを感じられるような取組を積極的に進める。
- ② 授業をはじめとする教育活動に、学校支援ボランティアをはじめ、家庭・地域の方々に積極的に参画いただく機会を進める。
- ③ 保護者に学校での子どもたちの様子を見ていただく機会を充実させ、学校だよりやホームページ等で子どもたちの活動を積極的に発信する。

## 6 学校における働き方改革の推進に向けた取組

上限時間に基づく目標		
成果指標①	1人当たりの月平均時間外労働	25時間以下(30時間以下の範囲)
	年360時間を超える時間外労働者数	0人 (変更不可)
	月45時間を超える時間外労働者の延べ人数	0人 (変更不可)
具体的な方策	<ul style="list-style-type: none"> <li>これまで実施してきたグループ研究部会のある水曜日だけでなく、職員会議・研修会・グループ研究部会のない水曜日や、委員会・クラブのない火曜日を、新たに「ノー残業デー」として位置づけ、原則17時30分までに退校できるようにする。</li> <li>出張後、本校に帰校することが勤務時間を超えるものについては、原則、直帰することを働きかける。</li> <li>共有場所(例:教材室や印刷室等)を、誰が見てもわかりやすく使えるように整理・整頓する。</li> </ul>	
休暇取得促進の目標		
成果指標②	1人当たりの年間休暇取得日数	10日以上(各学校で設定)
具体的な方策	<ul style="list-style-type: none"> <li>各自の年休取得日数の目標を、「昨年度の年休取得日数+1日」に設定する。</li> <li>効果的・効率的な業務遂行を心がけるために、これまでの前例にとらわれないような行事内容の精選を行う。</li> </ul>	
学校独自の取組		
活動指標	設定した日の定時に退校できた職員の割合	75%以上
	放課後に開催して60分以内に終了した会議の割合	80%以上
具体的な方策	<ul style="list-style-type: none"> <li>効率よく働くための工夫として、出張や年休等、授業を自習にした際のノート指導やテスト・プリントの採点補助を、当該職員以外の教職員で行う。</li> <li>教職員の多忙化、負担感の軽減のための具体的な取組について、定期的に話し合いを設定する。</li> </ul>	

# 《実施結果及び成果と課題》

達成度（定性的評価・定量的評価）の見方	
◎：十分に達成（満足）	95%以上
○：おおむね達成（満足）	85%以上 95%未満
△：達成（満足）せず	85%未満

<b>重点的な取組事項－1</b>	子どもたちに基本的な生活習慣や学習規律を身に付けさせるとともに、自他のよさを認め合い、「学ぶ喜び・わかる楽しさ」を体感させる授業、魅力ある教育活動を展開する。
-------------------	---

達成度		実施結果	成果と課題及び次年度への方向性			
A	○	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校生活が楽しいと感じている児童の割合…85%（昨年比▼4ポイント）</li> <li>・授業がわかりやすいと感じている児童の割合…93%（昨年比同数）</li> <li>・子どもたちの「わからない」をほっとかない授業づくりを推進した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「学校生活が楽しい」と感じている児童の割合が、85%（昨年度比－4ポイント）となり、目標を大きく下回った。早急にこれまでの活動を検証し、より子どもたちに魅力のある充実した教育活動を展開する必要がある。</li> <li>・「授業がわかりやすい」と回答している子どもたちの割合は高いが、客観的な数値結果（全国学力学習状況調査やみえスタディチェック等）に反映していない。本校の「強み」「弱み」を明確にし、「弱み」の克服に向けて、より効果的な取組をさらに推し進めていく必要がある。</li> <li>・子どもたち一人ひとりの学習状況を、テストだけでなく、ノートやアンケート等の記載状況から的確に把握するとともに、子どもたちにとって「理解しにくい箇所」や「つまずきやすい箇所」を、ていねいに指導するように心かけている。引き続き、子どもたちの「困り感」を解消できるよう、更なるスキルアップを図りたい。</li> </ul>			
		B	①	△	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ていねいな言葉遣いをしていると感じている児童の割合…79%（昨年比△2ポイント）</li> <li>・自分によいところがあると感じている児童の割合…83%（昨年比△1ポイント）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・定期的な教育相談等を行うなど、子どもたちからの思いを受け止められる取組や、「学びと生活の10か条」の取組を充実した結果、基本的な生活習慣や学校生活におけるルールの定着が昨年に比べて上昇した。</li> <li>・子どもたち一人ひとりに寄り添う指導を心がけた結果、子どもたちの「自己肯定感」が高まりつつある。引き続き、子どもたち一人ひとりの実態から、何をどのように伸ばすかを、教職員間で共有しながら進めることが重要である。</li> </ul>
			②	○	<p>全国学力・学習状況調査やみえスタディチェックの採点を全教員で実施し、本校児童の強み弱みを実感し、さらに分析することで、授業改善に向けた取組の参考とすることができた。</p>	<p>子どもたちの学習活動や生活状況を、学校だよりや個別懇談等で情報提供することができた。今後は、本校の「強み」「弱み」を明確にし、「弱み」の克服に向けて授業改善を図るとともに、保護者・地域と連携した取組を充実させていくことが重要である。</p>
③	○		<p>子どもたちが安心して学べる環境づくりを心がけることで、子どもたちの意欲・興味・関心を高める学習活動を推進することができた。</p>	<p>子どもたちにとって、自分を認めてもらえる先生や友だちがいることで、安心して学習したり生活したりすることができている。授業では「間違いから学び直す」場面を意図的に仕組むことで、間違ってもさらに深い学びにつながる学習をしたり、友だちと協力し合いながら課題を解決できる場面を作ったりすることが効果的であった。今後も引き続き、子どもたちが、意欲的に学習課題に立ち向かい、仲間とともに安心して学び続けられるように、「わからない」をほっとかないを合言葉に、取組を推進することが大切である。</p>		

<b>重点的な取組事項－２</b>	すべての教職員が働く喜びを感じ、組織としての力を向上させる取組を充実させる。
-------------------	--

達成度		実施結果	成果と課題及び次年度への方向性	
A	○	<ul style="list-style-type: none"> <li>目標達成に向けて、組織的かつ具体的な取組ができていていると感じている教職員の割合 …９３％（昨年比同数）</li> <li>日ごろの指導や取組に、「やりがい」をもてていると感じている教職員の割合…９３％ （目標値△１３ポイント）</li> <li>一人当たりの時間外勤務時間 …１３．２時間（目標値△６．８時間減）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>全教職員が一丸となって、研修テーマである「意欲をもって主体的に学び続ける子どもの育成」にむけて、組織的・計画的に取り組むことができた。さらに、教職員一人ひとりの力量が高まるような取組にしていきたい。</li> <li>「日頃の指導や取組に「やりがい」をもてている」と感じている教職員の割合が９３％となり、全教職員が一丸となり、すべての子どもたちにかかわる体制が定着しつつある。引き続き、子どもたち一人ひとりの状況を把握し、何をどのように伸ばすかを、教職員間で共有しながら進めたい。</li> <li>教職員一人ひとりが自らの働き方を見直すとともに、「ノー残業デー」の設定や効率的な仕事の進め方など、全教職員で共通した過重労働対策の取組をすすめた結果、一人当たりの時間外勤務時間（４月から１２月まで）の平均値は、１３．２時間となり、目標値の２０時間以下を達成することができている。今後も、仕事に「やりがい」を感じながら、総勤務時間の縮減にむけて、取り組んでいく必要がある。</li> </ul>	
	①	○	<p>日頃の取組の情報交換を積極的に進めるとともに、「ONEチーム」として充実した教育活動につながるような具体的な取組を話し合い、実践することができた。</p>	<p>子どもたちの実態から、指導の重点的な取組として「学びと生活のルール１０か条」を定め、さらに強化月間を設定して取り組んできた結果、子どもたちの行動に変容が見られた。今後も、子どもたちの豊かな学びと育ちに向けて、全教職員で意思統一を図り、実践していくことが大切である。</p>
	②	△	<p>子どもたちの「わかった・できた」などの言葉や、笑顔で元気いっぱい活動する姿の実現に向けて、すべての教職員で共通した指導・支援ができるような教育活動・教育環境の充実に向けて取り組んできた。</p>	<p>多くの子どもたちに安心して学べ取り組みを展開できたものの、まだまだ課題を抱える子どもたちの状況を少しでも改善するまでには至っていない。引き続き、取組の定着や徹底が図れるような具体的な手だてを検討し、実践していくことが重要である。</p>
③	△	<p>日頃から職員との積極的な話し合いを心がけ、効果的・効率的な業務推進に向けた助言・指導をすすめてきた。</p>	<p>教職員が元気であることが、子どもたちにも好影響を与えることから、誰もが働きやすい教職員集団を目指してきた。あたたかい雰囲気作りは生まれつつあるが、さらに、お互いのしんどさを共有し、少しでも改善できるように「チーム錦生赤目」を意識した取組を推進していく必要がある。</p>	

<b>重点的な取組事項－3</b>	家庭・地域と連携し、相互理解を深めるとともに、信頼される開かれた学校づくりを展開する。
-------------------	---

達成度		実施結果	成果と課題及び次年度への方向性
A	○	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の行事に参加していると感じている児童の割合…58%（昨年比△1ポイント）</li> <li>・ゲストティーチャーやボランティアなどを生かした教育活動を積極的に進めていると感じている保護者の割合 …97%（昨年比同数）</li> <li>・通信や授業参観などを通じて、教育活動や子どもの様子をよく伝えていていると感じている保護者の割合 …98%（昨年比△1ポイント）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今年度も、新型コロナウイルス感染症の影響で、地域で行う活動等が中止になったこともあり、子どもたちが地域の行事に参加することができなかった。新型コロナウイルス感染症の状況を見極めながら、子どもたちが参加できる内容等を検討していきたい。</li> <li>・コロナ禍ではあったが、学校支援ボランティアの方々にできる範囲の中で子どもたちの学習支援等に來校いただき、学習活動が充実した。今後も引き続き、地域と連携した取組の充実を図りたい。</li> <li>・各学年で子どもたちの様子等を、通信や懇談の機会に具体的に発信することができた。引き続き、子どもたちの様子を随時、保護者等に伝えていきたい。</li> </ul>
	① ○	日頃から地域との連携を密にして、地域での行事や取組に参加するように、子どもたちに積極的に働きかけてきた。	子どもたちが単に参加するだけでなく、積極的に運営等に係るスタッフとして活躍できるように、保護者や地域の方々と相談しながら、子どもたちの自主性や責任感を育む取組を充実させていきたい。
	② ◎	子どもたちの学習活動に学校支援ボランティアをはじめ、家庭・地域の方々にできる範囲の中参加いただく機会を設定した。	学校支援ボランティアの充実により、子どもたちの活動に大きな好影響を与えていただいている。今後も、更なる充実を図っていきたい。
B	③ ◎	コロナ禍ではあるが、感染防止対策を施しながら、できる範囲で、保護者や地域の方々に子どもたちの様子を見ていただく機会や、ホームページで学校の様子を発信する取組を充実することができた。	子どもたちの学習の状況や成果を家庭・地域に発信することができている。また、ホームページにタイムリーに子どもたちの活動を紹介するなど、今後も、子どもたちの様子を、家庭・地域に発信する取組を推進していきたい。

## 学校における働き方改革の推進に向けた取組について（成果と課題及び次年度への方向性）

<p>上限時間に基づく目標</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1人当たりの月平均時間外労働時間（4月から12月まで）については、13.2時間となっており、目標の20時間以下を達成できている。また、月45時間を超える時間外労働者も現在のところ0人であり、教職員が自身の働き方を意識しながら勤務に当たっている。</li> <li>・具体的な取組として、グループ研究部会のある水曜日だけでなく、職員会議・研修会・グループ研究部会のない水曜日や、委員会・クラブのない火曜日を、新たに「ノー残業デー」として位置づけたことや、出張後は原則直帰することを位置付けたことが、目標達成の一因となっている。</li> <li>・今後も、引き続き、時間外労働時間の削減にむけた手立てを積極的に検討していくとともに、総勤務時間の縮減にむけて取り組んでいきたい。</li> </ul>
<p>休暇取得促進の目標</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1人当たりの年間休暇取得日数は、令和3年1月から12月までの期間、一人当たり平均11日となっており、目標の10日以上を達成できている。</li> <li>・具体的な取組として、各自の年休取得日数の目標を、「昨年度の年休取得日数＋1日」に設定したことや、年休を取得した場合の子どもへの指導補充や業務補助等を積極的に取り入れたことも一因として考えられる。</li> <li>・今後も、引き続き、休暇が取得できやすい職場環境づくりに心がけていきたい。</li> </ul>
<p>学校独自の取組</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・設定した日の定時に退校できた職員の割合75%以上の目標値については、達成できている。</li> <li>・放課後に開催して60分以内に終了した会議の割合80%以上の目標値については、達成できていない。引き続き、会議開催の必要性を検討するとともに、会議内容のさらなる精選を図っていく必要がある。</li> </ul>

## 学校活動全般について

- 保護者アンケートでは、93%（昨年度比▼2ポイント）の保護者が「子どもは学校へ行くことを楽しみにしている」と肯定的な評価をいただいた。しかし、保護者に比べて児童が「学校生活が楽しい」と感じている割合が85%と低くなっており、裏を返せば約15%の児童、つまり約7人に1人の割合で「学校生活が楽しい」と感じていないという残念な結果となっている。コロナ禍では学校生活に大きな制約があり、また、感染防止の取組にしんどい思いをしていることが影響していることも考えられるが、すべての児童が学校生活を楽しくできる環境づくりを、全教職員がアイデアを出し合い、100%の児童が「学校生活が楽しい」と感じられるよう、学校体制で取り組んでいく必要がある。
- 「授業がよくわかる」と感じていると回答した児童の割合が94%（昨年度比同数）となり、子どもたちの意識の上では成果がみられる。しかし、全国学力調査結果等には十分に反映されていない。引き続き、児童一人ひとりの学習状況をていねいに把握し、本校の「弱み」の克服に向けて、学習規律の徹底や授業改善を積極的に進め、「学ぶ喜び・わかる楽しさ」を体感させる授業や魅力ある教育活動に取り組んでいくことが大切である。
- これまでも課題となっていたが、「家で宿題以外の勉強（自主学習も含む）をする（40%）」こと、や「学校や家で本を読む（70%）」ことの習慣が定着しきれていない。学力を高めるためには、学校での学習だけでなく、家庭での生活習慣を見直し改善し、家庭生活を充実させることが何より大切である。今後も、保護者の理解と協力を得られるような取組を展開し、児童の学習習慣や生活習慣の改善を図っていく必要がある。
- コミュニティ・スクールとして、これまで保護者・地域の方々と連携した取組を進めてきている。コロナ禍ではあるが、児童をはじめ関係者の健康・安全面を第一に考えながら、できる範囲の中で、本地域や本校の特色を生かしながら、児童にとって豊かな学びと育ちにつながるような取組を進めていきたい。